

# 早稲田大学現代政治経済研究所

朝鮮語研究の国際交流活動とネットワーク  
—朝鮮語研究会・韓漢語言学研究会等の国際学术交流について—  
伊藤 英人

No. J1406

## Working Paper Series

Waseda Institute of Political Economy

Waseda University

169-8050 Tokyo, Japan

朝鮮語研究の国際交流活動とネットワーク  
—朝鮮語研究会・韓漢語言学研究会等の国際学术交流について—\*1

伊藤英人（東京外国語大学）

目次

1. 前言
2. 言語名称の問題
3. 日本における朝鮮語研究団体
4. 朝鮮語研究会の活動
5. その他の機関による国際学术交流
6. 韓国語学習者増加と日韓協力
7. 新資料の発見による自生的国際共同研究
8. 小結

1. 前言 朝鮮語は日本列島において中国語に次ぐ長きに亘って教育学習されてきた「外国語」で

ある。江戸時代以前のこととはさておき、近代的教育制度下において、1880年東京外国語学校に、当時の隣国「朝鮮国」の言語を教育する「朝鮮語学科」が設立された。1897年「大韓帝国」建国に伴い、1899年同校(新外語)に「韓語学科」が創設された。1910年同学科は「朝鮮語」学科へ改称される。同年8月22日に「韓国併合に関する条約」が締結され、発効日の8月29日付で公布された勅令第三一八号に「韓国ノ国号ハ之ヲ改メ爾今朝鮮ト称ス」とされたためである。その後、1927年3月28日付文部省令第五号改正綱領「朝鮮ハイフマデモ無ク帝国ノ一部ナルヲ以テ其ノ地方ノ言語ヲ以テ外国語中ニ列スルハ其ノ事既ニ理由無シ依リテ之ヲ廃ス」により、同校朝鮮語学科は廃科された。

以上から知り得るように、日韓併合を境に朝鮮語は「外国語」から「帝国の地方の言語」すなわち「非外国語」へとその位置づけが変更された。近代日本の教育体制下で、「外国語」から「地方の言語」へと位置づけが変更され、一つの外国語学科が廃科された例は、朝鮮語を措いて他にないと考えられる。<sup>i</sup>

周知の如く第二次大戦後、「外国人登録令」（1947年勅令第二〇七号）により、日本

---

\* 本稿は2014年9月30日に早稲田大学現代政治経済研究所「日本の対外発信」研究部会（部会主任：砂岡和子）において報告した原稿に基づいている。報告の際には、布袋敏博先生（早稲田大学国際教養学部）、砂岡和子先生（早稲田大学政治経済学術院教授）、印省熙先生（早稲田大学文学学術院准教授）を始め、参加された方々から貴重なコメントをいただいた。

居住の朝鮮半島出身者は日本国籍を有したまま国籍欄に「朝鮮」と記載されるようになる。こう記載されたのは植民地期の「朝鮮戸籍令」適応対象者であり、この「朝鮮」は上述の「地域」呼称であって「国籍」ではない。1952年4月28日サンフランシスコ講和条約発効により、これらの人々は平和条約国籍離脱者として自動的に日本国籍を喪失した。同日「外国人登録令」代わるものとして「外国人登録法」（1952年法律第二百五号）が成立した。1950年代には大韓民国（以下：韓国）国籍への書き換え（「韓国籍」取得）が、本人が希望した場合に限り認められるようになり、1965年の日韓基本条約締結後、「国籍」としての「韓国籍」を取得する人が漸増した。しかしこれは本人が希望した場合に限る点において前代と変わらず、希望しない限り、「朝鮮籍」でありつづけ、かつこの「朝鮮」は「地域呼称」であって「国籍」でないという位置づけは現在も変わりが無い。朝鮮籍保持者と朝鮮民主主義人民共和国（以下：北朝鮮）及び朝鮮総聯支持者は一致せず、それらに反対する立場を取りつつ「朝鮮籍」を維持する場合も多い。

いわゆる定住コリアンには、したがって①上述の韓国籍・朝鮮籍保持者及びその子孫、②80年代以降に急増したいわゆるコリアンニューカマー及びその子孫、③中国朝鮮族出身者で自らを「조선사람：lit.朝鮮人」と規定する日本定住者及びその子孫、④上記①～③から日本国籍に変更したが、朝鮮半島にルーツを持つ朝鮮半島系日本人というアイデンティティーを持つ人々等が含まれることになる。

報告者が1994年以来、東京外国語大学で行っている「朝鮮語科教育法」で必ず言及するのは例えば以下のようなことである。日本列島における朝鮮語学習者の中には、明示的には知りえなくとも「自らを、学習対象言語を話す民族の一員と規定する」学習者が常に存在し得ること、したがって安易に授業において「日本人」などの用語を使用せず、「日本語母語話者」のように第一言語に基く呼称を採るべきであるといった注意点である。

一方で朝鮮語は朝鮮半島のみならず現在も日本列島で使用される言語の一つに数えられている。世界諸地域の言語に関するデータベースである ethnologue には日本手話、日本語及び琉球諸言語10言語の他に、アイヌ語と朝鮮語を日本列島の諸言語として挙げている。<sup>ii</sup>

朝鮮語をめぐる「日本」からの「国際発信」を論ずるに際しては、「日本」、「外国への国際発信」等の用語における「日本」、「外国」、「国際」などの語を、所与の、自明のものとする立場には、上述の歴史的経緯からも、安易には立てない。

## 2. 言語名称の問題 戦後の日本においては、1910年の勅令を踏襲した「朝鮮」を、朝鮮半島全体を指す

呼称として慣用的に使用してきた。南北分断にも関わらず、韓国と北朝鮮の言語は、1936年に朝鮮語学会が定めたソウル語を基盤とした「標準語」に基いており、単一の言語と看做す他ない。日韓基本条約締結後、日本では「朝鮮半島南部を領有する大韓民国」の略称として「韓国」の語を使用するようになってきた。韓国においては「朝鮮」は一種の禁

止語であって、歴史的、地理的に檀君以来「한 : lit. 韓」民族が活躍した半島を「한반도 : lit. 韓半島」、国名を「한국 : lit. 韓国」と称する。したがって「한국의 평양 : lit. 韓国の平壤」、「한국과 중국의 국경을 흐르는 압록강 : lit. 韓国と中国の国境を流れる鴨緑江」、「한반도 상공의 저기압 : lit. 韓半島上空の低気圧」のように言うのが普通である。日本語としてこれらの直訳表現がなじまないのは、上述の「朝鮮半島南部を領有する大韓民国の略称」の定義に反するからであり、南北に共通する言語を日本語で「朝鮮語」と称することは、現代日本語の慣用としては自然である。1970年代まで日本で使用された教材の多くは言語規範として北朝鮮のそれに従っており、言語名称も「朝鮮語」が一般的であった。1963年に大阪外国語大学に設置された朝鮮語学科では永らく北朝鮮の正書法が先に教育されてきた。<sup>iii</sup> 1977年には東京外国語大学に「朝鮮語学科」が復活し、同年富山大学人文学部に「朝鮮語・朝鮮文学コース」が設置された。

本来1983年には開始されるはずであった NHK 朝鮮語講座は名称問題により開始が遅れ、1984年「안니온하심니카 한글講座」として放送が開始され、そこでは一切言語名称を用いず「この言語では」という言い方が採用された。80年代中盤から「韓国語」の使用が目につき始める。1986年には神田外語大学に「韓国語学科」が設置され、2002年には東京大学に「韓国朝鮮文化研究室」が設置された。東京大学におけるこの言語の名称は現在も「韓国朝鮮語」である。一方、同じく文部科学省の管轄下にあるセンター試験に2002年から「韓国語」が加えられた。1985年に運輸省(当時)主管の通訳案内業試験に「朝鮮語」が加えられたが、国土交通省主管国家試験である通訳案内士試験科目は2006年に「韓国語」に改称された。

伊藤英人(2012)で述べたように80年代以降、日本で教授される朝鮮語は韓国のソウル標準語へとシフトし、現在に至る。上述の呼称問題はあくまでも「日本語内部」の問題であり、目標言語は総連系教育機関以外の大半においてソウル標準語となっている。なお、「東京外国語大学朝鮮語専攻」の「朝鮮語」による正式名称は「도쿄외국어대학교 한국어전공 : lit. トーキョー外国語大学校 韓国語専攻」である。<sup>iv</sup>

3. 日本における朝鮮語研究団体 現在日本において朝鮮語学に関する学会・研究会活動を行っている常設の研究組織は、①

「朝鮮学会」: 1950年10月結成、天理大学に事務局を置く、英語名: The Academic Association of Koreanology in Japan, Chosen Gakkai、朝鮮語名「조선학회 : lit. 朝鮮学会」、会員数600名程度、②「朝鮮語研究会」: 1983年4月結成、現在の事務局は東京外国語大学、英語名: SKLJ, The Society for Korean Linguistics in Japan、会員数276名、③「朝鮮語教育学会」: 1993年3月「朝鮮語教育研究会」として発足、2014年7月に現在名に変更、現在の事務局は九州大学、英語名: JaSKLE, Japan Society of Korean Language Education、朝鮮語名「한국어교육학회 : lit. 韓国語教育学会」、会員数140名、④「日本韓国語教育学会」: 1979年10月韓国語研究会日本支会として発足、

2010年創立、事務局：目白大学、⑤「福岡韓国朝鮮語教育研究会」：2008年4月設立、事務局：九州産業大学等々、複数の研究団体が存在し、活動を行っている。①は語学、文学、歴史学など朝鮮学全般に関する学会であり、朝鮮語学に関しても、その学会誌『朝鮮学報』は、戦後の朝鮮語学研究において核心的機能を果たしてきた。毎年10月に天理大学で開催される大会は2014年で第65回を迎える。②については後述する。③は主に西日本、⑤は九州地方を中心として活動を行っており、③は学会誌『朝鮮語教育－理論と実践』を刊行し、2014年には第9号が刊行された。④は永らく上智大学で朝鮮語教育に携った故柳尚熙同大名誉教授が夙に70年代にその基礎を作った研究会を継承した学会である。

#### 4. 朝鮮語研究会の活動

##### 4. 1. 朝鮮語研究会の設立

1章及び2章で見たように、朝鮮語はその名称自体がさまざまな立場を反映した問題を内包している。こうした中、純粋に学術的に朝鮮語学を研究する研究者たちのための研究会として朝鮮語研究会が、菅野裕臣氏、早川嘉春氏、故志部昭平氏を発起人として1983年4月に東京外国語大学で設立された。初代会長は東京外国語大学教授菅野裕臣氏である。<sup>v</sup>

この研究会は、発表者が、言語名称として「朝鮮語」、「韓国語」、「조선어 lit. 朝鮮語」、「한국어 : lit. 韓国語」の何れを用いてもよく、朝鮮語による発表論文は南北何れの正書法も可とした。まだ南北、韓中の接触が著しく制限されていた設立当初から日韓の研究者のみならず、中国朝鮮族、朝鮮総聯系研究機関の研究者の研究発表も行われた。83年から86年にかけての30回中に発表された研究を、発表者所属機関別に見ると、日本：17、韓国：7、中国：3、朝鮮総聯系：1、その他：2となっている。<sup>vi</sup>

報告者は1983年4月の第1回研究会から学生として参加していたが、韓国の研究者と中国、朝鮮総聯系の研究者が、互いに始めて接触し、学術的な交流を行う様を実際に目睹し、ある種の感慨を参加者が共有したことを明瞭に記憶する。

上述の如く30回に30の研究発表が行われたことから分かるように、当初は毎月開催、各回1名の研究発表を行い、質疑応答、討論に1時間程度を当てるという方式が採られていた。これにより、背景を互いに異にする研究者間の意思疎通に十分な時間が確保された。

上で述べたように、朝鮮語学の「国際交流」は、「日本」や「韓国」といった「国」単位のそれではない。上記「日本」の研究機関に属する研究者にも韓国籍研究者が含まれるが、朝鮮総聯系研究者や中国朝鮮族研究者との接触は韓国の研究者同様に、この研究会が機能し始める以前にはなし得なかった事実を勘案すると、80年代初頭の朝鮮語研究会の設立は、まさに日本における朝鮮語研究に即した「国際」学術交流であったと言うことが出来よう。

#### 4. 2. 2000年代以降の国際学術交流活動

1999年6月、朝鮮語研究会は学会組織に改変された。朝鮮語コースを有する国内の大学の教員7～9名による幹事会と、6名の海外編集諮問委員会(委員：韓国5、カナダ1)を設け、年数回の定例研究会(2014年9月第241回開催)、2002年からは学会誌『朝鮮語研究』の刊行(2014年度に第6号刊行予定)をほぼ隔年で行っている。

後述する2003年9月開催の第200回記念国際学術大会開催以降は、それまでの1回1名の発表から、1回に数名の発表を行う形式に変化したが、さまざまな背景を持つ研究者が学術交流を行う点は設立以来変化していない。なお同研究会の朝鮮語名は当面確定しないことを2011年7月の幹事会で申し合わせた。<sup>vii</sup>

2000年以降の朝鮮語研究会の研究会活動を、国際学術交流の観点から追ってみよう。

- 第167回 2000年6月20日 李炫馥大韓音声学会会長記念講演 第1  
80回 2001年10月8日 朝鮮語教育研究会との第1回合同研究会  
発表者：日本6名 朝鮮大学校(総聯系機関) 1名
- 第190回 2002年10月19日 任洪彬ソウル大学教授特別講演  
第200回 2003年 第200回記念国際学術大会  
発表者：日本7名 韓国9名 第21  
0回 2005年7月9日 - 10日  
韓国二重言語学会・韓国語教育学会との国際学術大会  
「日本における韓国語教育と二重言語教育」
- 第216回 2007年10月9日 朝鮮語教育研究会との第2回合同研究会  
招待講演：韓国1名 発表 日本3名
- 第233回 2012年9月8日 朝鮮語教育研究会との第3回合同研究会  
第241回 2014年9月13日 朝鮮語教育学会との第4回合同研究会

以上の内、第200回記念国際学術大会は韓国国際交流財団の援助を得て開催されている。第210回は、韓国所在の二つの学会との共催であるが、2000年代に「韓国語世界化」の流れの中で韓国に急増した「外国人のための韓国語教育」を掲げる大学院、学会との交流が盛んになる中で開催されたもので、朝鮮語研究会会員が韓国のこれらの学会に招聘その他の形式で参加する機会が増えるのもこの頃からである。

上に記したものの以外の定例研究会における発表者は、上述同様に所属機関別に見ると、約三分の一が韓国の研究機関の研究者であり、日本の機関所属の発表者の過半は日本の大学院等に在籍する韓国人、中国朝鮮族の大学院留学生及び外国人研究者である。

学会誌『朝鮮語研究』はほぼ隔年で刊行されるが、第1～3号はくろしお出版、第5号以降はひつじ書房から刊行されている。既刊5号に掲載された論文は分野として、音声学、音韻論、統語論、語彙論、朝鮮語教育、日韓対照言語学、語用論、社会言語学、朝鮮語史

に互る。同誌は国内外の朝鮮語研究機関に送付されている。このように83年に手弁当的な組織として始められた朝鮮語研究会は現在も研究者による自律的運営の性格を残しつつ活動を継続している。2000年代の「韓流ブーム」以降の韓国語学習者増加とそれに伴う教員の増加により、近年、朝鮮語教育、日韓対照言語学に関する発表が増えている。<sup>viii</sup>

5. その他の機関による国際学术交流 前述のように2002年に東京大学韓国朝鮮文化研究室が設置されたが、同大学は夙に

1994年から学術誌『朝鮮文化研究』を毎年刊行し、それには多くの朝鮮語学関連の論考が掲載されている。2002年以降は韓国朝鮮文化研究室が同誌を刊行し、2007年第10号より『韓国朝鮮文化研究』と誌名を改め、現在に至る。また毎月「 코리아・コロキウム」を開催し、内外の朝鮮語学研究者も累次講演を行ってきた。2008年10月24日～26日には「東京韓国語学国際学術大会」が同大韓国朝鮮文化研究室、ソウル大学国語国文学科の共催により東京大学で開催された。

1994年7月には第2回環太平洋韓国学国際学術会議東京大会が、東京外国語大学朝鮮語学科が事務局となって開催された。また2000年代から2010年代にかけて、1960年代以来日本の朝鮮語学研究を牽引してこられた梅田博之氏、藤本幸夫氏がそれぞれ学長、言語研究センター長として在籍する麗澤大学において、日韓人文学・日韓言語学の国際学会が累次開催された。

早稲田大学韓国学研究所は2013年10月に設置され、シンポジウム、定例研究会等を行っている。<sup>ix</sup>設置は近年のことに属するが、周知の如く早稲田大学は朝鮮語、朝鮮文学、朝鮮史を始めとする研究・教育活動を日本においてかなり早い時期から展開しており、後述する如く、設置以前にも朝鮮語学に関する重要なシンポジウムを行っている。

その他、国立国語研究所、アジア・アフリカ言語文化研究所等の機関、各大学における国際学術会議、個々の研究者による科研費による国際学術交流活動等はあまりに多岐に互るためここでは言及しない。<sup>x</sup>

6. 韓国語学習者増加と日韓協力

2000年代に入って日本における韓国語学習者が急増したことは周知のとおりである。2002年にはワールドカップ日韓共同開催があり、同年1月には大学入試センターの外国語試験に韓国語が正式に導入された。2003年にNHKのBS海外ドラマ枠で放映された「冬のソナタ 겨울연가」に代表されるいわゆる「韓流ドラマ」ブーム、その後のK-POPの流行などにより、女性を中心とした幅広い年齢層が韓国語の学習を始めた。後者は、韓国政府による韓国文化コンテンツ産業支援政策と不可分の関係にある。

日本における韓国語学習者の増加に伴い、大学、民間語学学校等において韓国語を教授する教師の数も増加した。2001年2月には韓国政府の傘下団体として、韓国語海外普

及び外国語としての韓国語教育提供を目的とした「韓国語世界化財団」が発足している。また韓国では2005年7月27日付大統領令第18973号として公布された「国語基本法」により「韓国語教員資格」が規定され「韓国語教育能力検定試験」が実施されることになった。日本で韓国語教育に携る母語教員間においてもこれを取得しようとする動きが生じてきた。

こうした中で韓国語教師のための韓国語学、韓国語教育学の研修が必要となり、2002年から2012年にかけて「(大学等)韓国語教師研修」が東京、京都、大阪、福岡、名古屋、札幌、新潟等で毎年夏の約1週間に亘って開催されてきた。これは財団法人国際文化フォーラムの小栗章氏及び韓国文化院の清水中一氏が企画の要役となって韓国国際交流財団、駐日韓国文化院等の支援協力を得て実現されたものである。首都圏、関西圏及び他地方の韓国語教師に韓国語学、韓国語教育学に接する機会が、韓国諸機関の支援の下で与えられたという点で特記すべきである。国際文化フォーラムは高等学校韓国語教師研修を行っており、韓国文化院・世宗学堂は2011年以来、韓国語教師週末研修を行っている。2006年6月には韓国言語文化研究院主催による「日本人のための韓国語教授法研修」が東京で行われたが、これは上記韓国語教員資格対策のための研修であった。これら以外にも同種の研修が2000年代以降累次行われている。

2000年代以降のこうした韓国語教師研修はそれ以前には見られなかったいくつかの特徴を持つ。多くが韓国の諸機関の支援を受け、当然のことながら韓国の言語規範に基づく言語の教授法が講じられ、日本語母語話者教員、日本語を解する韓国語母語話者教員が、学習者の母語不問の韓国における韓国語教育法との仲介役を果たした点などがそれである。この時期、言語名称は、刊行されるテキストを含め、ほぼ「韓国語」に統一されてゆき、90年代までは括弧内に表示されていた北朝鮮式語形もほぼ姿を消した。

2002年に開始された韓国語センター試験は上記の韓国語ブームとは関係なしに実施されることとなったものである。2000年5月の日韓首脳会談での言及に端を発する韓国語センター試験は、高等学校における朝鮮語教育の実態とは無縁に開始されたと言ってよい。<sup>xi</sup>言語名称は「韓国語」であるものの、そこでは南北双方の正書法の使用が認められている。なお、1993年に開始された「ハングル能力検定試験」も南北双方の正書法を認めている。

## 7. 新資料の発見による自生的国際共同研究

### 7.1. 「訳学書」と「訓読」 朝鮮王朝は周辺諸国との「事大交隣」のため、中国語、モンゴル語、満州語、日本語の

通訳及び通訳官養成のための機関である「司訳院」を設置し、朝鮮時代を通してこの四言語の教科書、会話書、語彙集その他の対訳資料を刊行してきた。この司訳院におけるこの四語学を「司訳院四学」と呼び、それぞれ「漢学」、「蒙学」、「清学」、「倭学」と称し、教科書類を「訳学書」と総称する。中でも漢学書である『老乞大』は朝鮮時代を通して数次



に互る改修を経ているのみならず、同一内容のテキストのモンゴル語版、満州語版も存在するところから、中国語学、朝鮮語学、モンゴル語学、満洲語学の関心の対象となってきた。16世紀初には朝鮮を代表する中国語学者である崔世珍によって、ハングルによる注音（声調の変調記述を含む）、朝鮮語訳、語彙文法注釈が作られた。現存する『老乞大』は永らくこの崔世珍による翻訳が最古のものであったが、これは明代の中国語を記したものであった。1998年初め、元代の言語を反映したテキストである『旧本老乞大』が韓国大邱市の個人の蔵書から発見された。以下7. 2. では『旧本老乞大』発見以降に関連諸学会をまたいで自生した国際共同研究について言及する。

日本とともに漢字文化圏に属する朝鮮では、日本と異なり、今日では漢文を訓読することがない。1973年に韓国瑞山文殊寺金銅仏胎内から『旧訳仁王経』が発見され、朝鮮半島にも漢文訓読が存在したことが明らかになった。その後も資料の発見が続き、研究が進んでいた。そうした中、2000年7月7日に韓国で高麗時代角筆文献が発見され、2002年には京都大谷大学所蔵の新羅写経から角筆による訓点が発見された。7. 3. ではその後の訓点、訓読に関する国際的研究の一端に触れる。<sup>xii</sup>

## 7. 2. 訳学書に関する国際共同研究

『老乞大』は大元 ulus の一部となった高麗において、元代華北の共通語であった「漢兒言語(中国語クレオール)」を学習するために作られた会話書である。高麗商人が二人の従兄弟と馬、高麗人参、布類を持って高麗王京から大都(北京)に商売の旅に出る。途中で中国人商人の王さんと道連れになり、問答を重ねつつ大都に行き、宿の主人の紹介で高麗特産の馬を売り、契約書を交す。弓のゲームやモンゴル式宴会などで大都を満喫する。飲みすぎ食わずで医者に掛かった王さんがやっと涿州に商売に行くと、高麗商人はその間に人参、布を売り払う。涿州から王さんが帰ると一緒に高麗で売る日用品、書籍を購入し、占い師に出発の日取りを占ってもらい、大都を旅立つというストーリーで、全編が対話からなる。1998年に発見された『旧本』はそれまで知られていなかった元代の紙幣の両替、モンゴル風の宴会の様子、モンゴル人に接する時の注意点等、語学以外の歴史、文化史、食物史その他に関する注目すべき多くの記載があり、研究者の注目を引いた。2002年2月には金文京・玄幸子・佐藤晴彦(2002)による日本語全訳と注釈が刊行されている。『老乞大』を含む訳学書及び中韓言語接触に関する研究者間の国際的ネットワーク形成においては、青山学院大学教授遠藤光暁氏が中心的役割を果たしてきた。2005年3月には韓国漢陽大学教授嚴翼相氏との協働により、第一屆韓漢語言学国際學術研討会が、韓国學術振興財団、漢陽大学の援助の下、ソウル漢陽大学で開催された。韓国、日本、中国、台湾から100名以上の研究者が参加し、『老乞大』等漢学書、朝鮮韻書、韓漢語彙等に関する22編の論文が発表された。その後2年に一度のペースで同規模の国際学会が、第二屆2007年6月に日本青山学院大学相模原キャンパス、第三屆2009年9月山東大学威海分校、第四屆2011年5月台湾国立中山大学、第五屆2013年8月中国浙江

大学漢語史研究中心の順で開催されている。それらの内、第四屆までの論文集は韓国学古房から『韓漢語言学研究系列』として刊行された。また韓国博文社から刊行された遠藤光暁・伊藤英人・鄭丞恵、竹越孝・更科慎一・朴真完・曲暁雲共編(2009)は、全ての漢字圏の研究者の利便のため、ハングル表記を漢字表記に改め、韓漢言語学関連の原典、関連文献を目録化したものである。これは後述の訳学書学会創立に献ぜられたものである。遠藤光暁氏が主催する東ユーラシア言語研究会は2008年6月、青山学院青山キャンパスにおいて「司訳院四学の総合的研究に関する会合」を開催し、日、中、韓、南モンゴルの学者が研究発表を行った。<sup>xiii</sup>これが端緒となり翌年2009年9月に韓国又石大学で「訳学書学会」創立学術大会が開かれた。鄭光高麗大学名誉教授を会長として設立されたこの学会は韓国の学会として日韓中の地域に幹事を置き、毎年国際学会を開催する一方、『訳학과 訳学研究』博文社を学会誌として刊行し現在に至る。上記『韓漢語言学研究系列』の使用言語は主に中国語、『訳학과 訳学研究』は韓文、中文、和文、欧文による多言語による。同学会は現在は「国際訳学書学会」と改称されている。

訳学書学会は韓国において正式の学会として設立されたが、韓漢語言学研討会は、これといった中心的組織を持たず遠藤光暁氏(青山学院大学)と 嚴翼相氏(漢陽大学)との間の個人的ネットワークによって、活動が継続されてきた。竹越孝氏(神戸外国語大学)、汪維輝(浙江大学)、朴在淵(鮮文大学)の各氏が参与した。いずれも朝鮮訳学書を研究する中国語史研究者である点に特色がある。なお、韓漢語言学研討会は第五屆をもってその活動を終え、以降は、文献学的研究は、訳学書学会において交流が行われることが期されている。それでカバーしきれない漢字音など非文献学的側面については嚴翼相氏が2015年より *International Symposium on Sino-Korean Linguistics* を立ち上げる運びとなっている。

### 7. 3. 「訓読」をめぐる国際学術交流

1973年に韓国で漢文訓読資料が発見されて以来、韓国では「口訣学会」が中心となって朝鮮半島における漢文訓読研究が集中的になされてきた。<sup>xiv</sup>日本の朝鮮語学界では上述の藤本幸夫富山大学/麗澤大学名誉教授が早い時期からこの問題を扱ってこられた。上述の角筆文献の発見、また近年発見が相次いだ韓国の木簡資料研究の発展を踏まえ、2000年代以降、日韓の漢文訓読に関する国際学術交流が朝鮮学会その他で行われた。2003年7月に富山大学で「日韓漢字・漢文受容に関する国際学術会議—日本の漢文訓読はどこから来たか」が開催され、韓国から言語学者・専門家30名、ドイツから1名が招かれ、日本国内から外国人を含む研究者54名が参加した。

2000年7月7日にソウル誠庵古書博物館において、日本語の角筆訓点研究の第一人者である小林芳規広島大学名誉教授によって角筆訓読資料が発見された。小林博士と、韓国における訓読研究のパイオニアであり口訣学会を率いてきた南豊鉉檀国大学名誉教授により、日韓の訓読研究者の交流が活発に行われ、韓国で角筆訓点文献が続けて発見されると共に、韓国研究者による日本および韓国の訓点資料調査も年に数度の頻度で行われるよ

うになる。藤本幸夫(2012)に言う如く「これほど緊密な日韓の学会交流は稀」であると言える。<sup>xv</sup>

2009年から2012年にかけて、藤本幸夫麗澤大学言語研究センター長が中心となり三次に亘って「日・韓訓読シンポジウム」が開催された。このシンポジウムでは朝鮮訓読のみならず、日本訓読、ウイグル訓読、木簡資料等に関する発表が行われた。

「訓読」は語学のみならず、文化史、文学、思想史方面の研究者からも関心を持たれる分野である。中村春作・市來津由彦・田尻祐一郎・前田勉共編(2008, 2010)、中村春作編(2014)は語学よりも文化史、文学、思想史に関する論考を多く含む。

こうした広義の訓読論に関する国際シンポジウムが2013年6月に早稲田大学で開催された *Accessing the Cosmopolitan Code in the Sinographic Cosmopolis, Learning Literary Sinitic in Traditional East Asia- Evidence from mokkan to the 20<sup>th</sup> Century* である。Sinographic Cosmopolis の名付け親であるロス・キング教授が所属するカナダブリティッシュコロンビア大学、韓国、オーストラリア、日本、アメリカ、ベトナム等の研究者が参加する中、日本における東洋史学・韓国考古学・金石文研究の第一人者である李成市早稲田大学文学学術院教授による平壤出土論語木簡に関する講演を皮切りに、訓読をめぐるさまざまな文化現象について活発な討論が行われたことは記憶に新しい。このシンポジウムを継承する形で2014年6月末から7月初にかけてカナダブリティッシュコロンビア大学で Hanmun workshop 及び訓読に関する学術討論会が開催され、日韓豪米の研究者が発表討論を行っている。

国立国語研究所プロジェクト「日本列島と周辺諸言語の類型論的比較歴史的研究」(プロジェクトリーダー: ジョン・ホイットマン教授)も訓読現象を世界的な視点から見直そうとするための国際研究交流を行っている。ごく最近では2014年7月31日、8月1日に行われた NINJAL セミナー「自言語による古典語文献の解説」(運営: 小助川貞次・富山大学教授)による研究発表会で日韓の訓点研究者とヨーロッパのラテン語注釈研究者(フランス、イギリス、アイルランド、スイス)が国立国語研究所において研究交流を行った。<sup>xvi</sup>

## 8. 小結 以上、極めて非網羅的ではあるが、主に1980年代以降の朝鮮語学の国際学術交流に

ついて概観した。南北、中韓交流が制限されていた時期の日本における朝鮮語学の学術研究を目的とした自発的な集いから、2000年代の韓国語ブームにおける日韓交流、「訳学書」と「訓読」に関する新資料の発見を契機とした自生的国際学術交流の発生及びその後の発展について見渡した。報告者が、朝鮮時代以前の漢字文献研究を専門とするため、現代語研究等を始めとする朝鮮語学諸分野の国際交流について言及できておらず、また報告した分野についても遺漏の多からんことを懼れるばかりである。

## 参考文献

伊藤英人(1989)「在日朝鮮人によって使用される朝鮮語の研究の必要性について」東京外国語大学井上史雄研究室編『日本語多言語使用についての実態調査』47-59頁

伊藤英人(1996)「コリアンニューカマーズの日本語使用の一端について」『青丘学術論叢』8, 299-310頁

伊藤英人(2006)「現代における朝鮮半島以外のコリア語」『世界のコリアン』勉誠出版, 32-42頁

伊藤英人(2012)「朝鮮語発音教育の問題点」中国語教育学会『中国語教育』10, 45-76頁  
遠藤光暁・伊藤英人・鄭丞惠、竹越孝・更科慎一・朴真完・曲曉雲共編(2009)『訳学書文

献目録』博文社 金文京・玄幸子・佐藤晴彦(2002)『老乞大一朝鮮中世の中国語  
会話読本』平凡社東洋文庫

699、平凡社 桂正淑(2005)「日本における韓国語学習・教育の問題点」『駿河台大学文化情報学』12-2,

pp.33-45

小林芳規(2004)『角筆文献研究導論』上巻、東アジア篇、汲古書院 武井一編(2014)『高等学校韓国朝鮮語教育ネットワーク活動報告』国際文化フォーラム 中村春作編(2014)『東アジア海域に漕ぎだす5、訓読から見なおす東アジア』東京大学出

版会 中村春作・市來津由彦・田尻祐一郎・前田勉共編(2008)『「訓読」論』勉誠出版 中村春作・市來津由彦・田尻祐一郎・前田勉共編(2010)『続「訓読」論』勉誠出版 藤本幸夫(2012)『日・韓訓読シンポジウム』麗澤大学言語研究センタ

ー

i 一方で1925年には天理外国語学校朝鮮語部、1926年には京城帝国大学朝鮮語朝鮮文学科が開設されている。琉球語、アイヌ語などはそもそも外国語として教育されず、「清語」>「支那語/満洲語」は最後まで「外国語」であった。また、漢文教育で行われた「時文」教育は、訓読されるためこれを「外国語」教育に含み得るかが問題となるが、テキスト自体は口語要素を含む中国語であった。

ii [www.ethnologue.com](http://www.ethnologue.com) 参照。朝鮮語の海外変種については伊藤英人(1989, 1996, 2006)参照。

iii 伊藤英人(2012)参照。

iv 中国においても言語名称の問題は存在する。「朝鮮語」は国内少数民族の公用語、「韓国語」は外国語である。《新华字典》第10版は「韓」には戦国時代の国名の意味しか記載せず、また10版以降「高麗」の①を「高麗1. 我国古族名, 古代国名。又称“高句丽”。」と改訂している。東北工程の反映と思しい。東北工程は中国東北部(満洲)、沿海州の歴史研究のための中国の国家プロジェクトであり、2006年には渤海、高句麗の帰属をめぐる中韓の外交問題になった。

v その後の会長職と事務局の変遷は以下の通りである。以下、敬称略。1990年11月-1992年8月: 志部昭平(事務局は東京外国語大学)、1992年8月-1997年12月: 菅野裕臣(東京外国語大学)、1997年12月-2004年5月: 野間秀樹(東京外国語大学)、2004年5月-2008年1月: 福井玲(東京大学)、2008年1月-2011年7月: 岸田文隆(大阪大学)、2011年7月-現在: 伊藤英人(東京外国語大学)。

vi 発表者の nationality, ethnicity ではなく所属機関による。「中国3回」は朝鮮族研究者、「朝鮮総聯系1回」は朝鮮大学校教員(朝鮮籍)、「その他2回」はワルシャワ大学教員であ

る。

vii 報告者が会長職を担当することになった際に行われた幹事会での申し合わせである。上述の如く「朝鮮語教育学会」は「한국어교육학회 : lit.韓国語教育学会」、「朝鮮学会」は「조선학회 : lit.朝鮮学会」、「東京外国語大学朝鮮語専攻」は「도쿄외국어대학교 한국어전공 : lit.トキョー外国語大学校 韓国語専攻」をその朝鮮語名としている。報告者は設立時の趣旨からも敢えて朝鮮語名を決定すべきでなく SKLJ を用いることを主張しているが、韓国においても日本国内においても「조선어연구회 : lit.朝鮮語研究会」と称されることが多い。理由の一つとして韓国において中国朝鮮族や北朝鮮との交流が盛んになるにつれて「조선어 : lit.朝鮮語」という語に対する拒絶感が研究者について言えばあまり無くなったことが考えられる。今後の決定に俟つところである。

viii 2000年代に急増したこの言語の学習者は自らの学ぶ言語を「韓国語」と認識していたと思われる。以下、本文でも朝鮮語の意味で「韓国語」を混用する。

ix 同研究所は早稲田大学自体の機関ではない。布袋敏博先生のご教示による。

x 本広告で触れ得なかった WEB 上の成果公表の一例を挙げれば、「朝鮮語史の国際共同研究のための研究資源基盤構築」科研費基盤 B2009~2011 (研究代表:伊藤英人)等がある。

xi 高校の朝鮮語教育について言えば、1999年には「高等学校韓国朝鮮語教育ネットワーク(JAKEHS)」が発足し、国際文化フォーラム、韓国文化院、日韓文化交流基金、韓国国際交流財団、韓国国際教育振興院、東京韓国教育院、大阪韓国教育院、東京都教育委員会、大阪府教育委員会等とかかわりをもちつつ、研修等の活動を行ってきた事実がある。国際文化フォーラムが韓国朝鮮語教育の実態調査を開始したのは1997年である。

xii 角筆とは「象牙や木や竹を材質とする箸のような筆記具であり、その先端をもって板面や和紙の面を直接に傷付け凹ませることによって文字や訓点の符号や図譜を書いた」ものである(小林芳規 2004)。なお、報告者は訓点訓読に関する研究に参加するようになったのがごく近年であるため、7. 3. の記述は概略的なものに留まる。

xiii 本報告では öbür monggol の直訳形「南モンゴル」を使用する。

xiv 高麗漢文訓読資料は次のような形で示される。

由<sub>良</sub>此障碍<sub>乙</sub>・於一切種<sub>良中</sub>不<sub>只為弥</sub>能・出離・ (『瑜伽師地論』8:08-12) 縦書き本文の文

字列の右左は上下で示す。書き込まれた略体口訣字は印刷の便宜上元の漢字に戻した。これは次のように訓み下される。「由」は左のみに口訣があるので飛ばし「此障碍<sub>乙</sub>」を先に読む。「乙」の下に返読点「・」があるので上に返って「由<sub>良</sub>」を読む。「於」は置き字で「一切種<sub>良中</sub>」を読む。「不」と「能」は左に口訣があるので飛ばし「出離」を読む。「出離」の下に返読点「・」があるのですぐ上に返って「能」を読み、「能」の下に返読点「・」があるのですぐ上に返って「不<sub>只為弥</sub>」を読む。

此障碍<sub>乙</sub> [於] 由<sub>良</sub> 一切種<sub>良中</sub> 出離 能 不<sub>只為弥</sub>

i 障碍 rAr pit<sup>h</sup>-ə 一切種 ahΛi 出離 能 antAk hAmyə  
この障碍によって一切種に出離あたわず

---

<sup>xv</sup> これに前後する訓読関連国際会議として、第1回アジア諸民族の文字に関する国際学術会議, Seoul 1996 (大会長: 南豊鉉)、国際Workshop “漢文古版本とその受容(訓読)”, Sapporo 2001 (主催者: 石塚晴通)、第2回国際学術大会 “漢文の受容と読法”, Seoul 2001 (運営者: 金永旭)、北海道大学大学院文学研究科国際学術会議 “日本学・敦煌学・漢文訓読の新展開”, Sapporo 2004 (実行委員長: 石塚晴通)、東方学会50周年記念国際シンポジウム “漢文の自言語による訓読”, Tokyo 2005 (企画者: 石塚晴通)、第3回国際学術会議 “漢文読法とアジアの文字”, Seoul 2005 (運営者: 金永旭)、国際Workshop “典籍交流(訓読)と漢字情報”, Sapporo 2006 (主催者: 池田証壽)、国際学術会議 “古代韓日の言語と文字”, Seoul 2007 (委員長: 李丞宰)、国際Workshop “漢字情報と漢文訓読”, Sapporo 2009 (主催者: 池田証壽)、EAJS Panel “The Scope and Prospects of Kuntten Research in Japan”, Tallinn 2012 (発表代表者: Alberizzi Valerio Luigi)、NINJALセミナー “漢文訓読再発見”, Toyama 2012 (主催者: 高田智和・小助川貞次)、国際Workshop/NINJALセミナー “自言語による古典語文献の読解”, Tokyo 2013 (主催者: 小助川貞次・John Whitman) 等が行われている。

<sup>xvi</sup> 本年10月開催予定の日本語学会において「自言語による漢文文献の訓読」として石塚晴通(北海道大学)、小助川貞次(富山大学)、伊藤英人(東京外国語大学)、岩月純一(東京大学)、John Whitman(国立国語研究所)、Alberizzi Valerio Luigi(早稲田大学)、月本雅幸(東京大学)、山本真吾(白百合女子大学)によるワークショップが開催され、上述のヨーロッパの「訓読」を始め日韓越の訓読現象に関する発表討論が行われる。